

報告事項 シ

新種の魚類化石の発見について

新種の魚類化石の発見について、別紙のとおり報告します。

平成20年1月18日

鳥取県教育委員会教育長 中 永 廣 樹

新種の魚類化石の発見について

1 新種の魚類化石と発見までの経緯

- 鳥取市国府町宮下で発掘された魚類化石が、浅い海に生息するイソギンポ科の新属・新種と分かり、「トットリムカシギンポ *Tottoriblennius hiraoui*」と命名・発表された。

※平成 19 年 12 月 21 日発行の『国立科学博物館研究報告C類 第 33 巻』に、藪本美孝博士（北九州市立自然史・歴史博物館）と上野輝彌博士（国立科学博物館）により論文発表〔英文〕。

- 平成 14～16 年に県立博物館が行った「化石産出地調査事業」において得られたもので、学名の「*hiraoui*」は、本事業を行った平尾和幸氏（当時：自然係長）に献名された。

2 トットリムカシギンポ *Tottoriblennius hiraoui* の学術的意義

- この種類の魚類化石は、日本をふくむ太平洋西部で初めてで、世界的にも珍しい。
- 化石の全長は約 2 cm。背びれや胸びれのとげの数などが、現在知られているイソギンポ科のどの種類とも異なり、イソギンポ科魚類の進化を探るうえで重要な存在。
- 鳥取市国府町宮下の鳥取層群普含寺泥岩層（1,680 万年前）は、これまでも 6 種の新種が報告されるなど浅い海の魚が多種類まとまって産出し、魚類相の進化を考えるうえで、アジア地域でも群を抜いた魚類化石の宝庫である。

※既報告の 6 種【（ ）内は発表年】：セダカイケカツオ(1991 年)、トットリビラメ(1993 年)、トットリヒイラギ(1994 年)、ミヤノシタサツパ(1999 年)、ミヤノシタシヤモ(1999 年)、イナバケツギョ(2000 年)

3 展示公開と今後の研究について

- トットリムカシギンポの展示公開は、『魚類化石の宝庫：鳥取市国府町宮下』のようなタイトルで、3 月中旬以降に常設展示室で行う（3 月 7 日まで臨時休館中であるため）。

- 展示公開までの期間は、県立博物館ホームページで情報を公開。

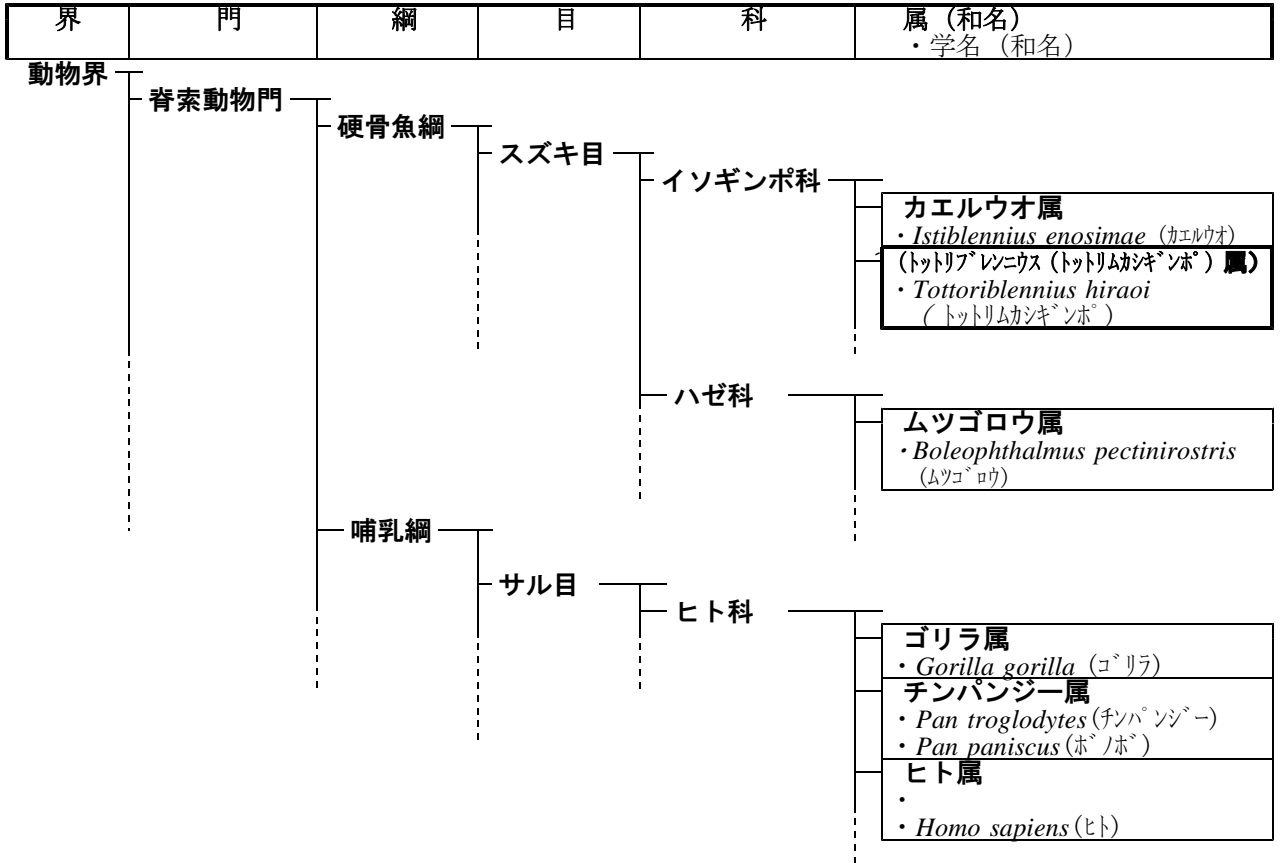
- 鳥取市国府町宮下の魚類化石には、他にハゼ科、サバ科など未解明のものも見つまっている。引き続き全国の研究者とともに研究を継続し、日本の約 1600 万年以降の魚類相の進化を解明していく。



トットリムカシギンポ

1 新属・新種の発見とは

■他の魚類（ハゼ科）で言えば「ムツゴロウ」と言う新たな属と種を発見したようなもの。
 （属と種は、「ヒト」で言えば、「ヒト属（*Homo*）」及び「ホモ サピエンス（*Homo sapiens*）」に対応）



2 生物の学名の命名法

■属名+種名の2名法で命名される。

学名	(カタカナ読み)	和名
<i>Tottoriblennius hiraoui</i> (属名) (種名)	トットリアブレニウス ヒラオイ	トットリムカシギンポ

3 化石の地質年代

■今回の化石は 1,680 万年前の地層から見つかっているが、それは地質年代では **中新世 (Miocene)** と言う今から約 2,300 万年前から約 500 万年前の時代で、日本がユーラシア大陸から分離し、日本海が形成されていく時期である。